

路上生活者の個人史

第10回

竹中尚文

宮城 伸一郎 氏(仮名)

1989年11月生

私は札幌で生まれました。現在34才です。家族構成は父母と弟の4人家族でした。家族といっても、私は生まれたときから障害がありましたので、幼児期は小児病棟で育ちました。幼児期、私の命が続くか判らない状態だったようです。私は生きながらえることができ、院内学級のある病棟で育ちました。そこはターミナルケアを受ける子どもたちが多くいる場所でした。私はそこを生きて出ることができて、家に戻りました。両親は次の子どもを望んで弟が生まれました。

家に戻ってから、「産むのじゃなかった」といわれ続けて暴言暴力を受け続けました。子どもとして最も

つらい言葉でした。子どもながらに居場所のなさを感じていました。家族とは両親と弟の3人で、私はその中には入れてもらえませんでした。中学に入る前には勉強がしたくて私立中学を望みましたが、かなえられる希望ではありませんでした。公立中学校にも満足に通わせてもらえませんでした。私は勉強がしたかったので何とか高校に入れてもらいましたが、高校卒業の資格が取れるということだけがセールスポイントで、内部暴力が日常的な高校でした。山間部の交通手段の全くない刑務所のような学校でした。高校卒業後はさらに勉強がしたくて、大学を受験して入学をしました。大学入学で関西に来ました。もちろん親からの援助はありませんから、大学の

学部と修士課程の6年間に奨学金を受けて、学部卒業して修士修了をしました。

経営学修士(MBA)を取得したのですが、学部を卒業したときも、修士を修了したときも、リーマン・ショックとかで就職状況は極めて悪いものでした。社会の不景気に加えて私は身体的ハンディもあるために高給といえるような所に就職できませんでした。もう勤続10年になりますが、昇給はありません。この中で奨学金の返済をしていかねばなりません。6年間に約2千万円の奨学金を受けていました。この10年で約1千万円を返済しました。1年に100万円ですから、毎月10万円近い返済になります。給料が手取り15万円程ですから3分の2を返済に充てるわけです。とっても住まいを借りて生活をするような経済

状態ではありません。会社には友人宅を住所として届けていますが、現実にはホームレス生活をしてきました。そんな中でビッグイシューの存在を知りました。ビッグイシューの方々の手助けで「特定疾患医療受給者証」や「障害者手帳」を申請することができました。このようなことは、私の親が一切してくれなかったもので、本当に助かりました。ビッグイシューの方に教えていただいて、シェルターの存在も知りまし、今のこの出会いをすることができました。

夢ですか？ 高校生に戻って、母親の作ってくれたお弁当を持って父親の通勤と同じ電車に乗って学校に通ってみたいです。帰り道に友達とハンバーガーを買って食べたいなと思います。

世の中で、しっかり仕事をしていけばホームレスにはならないと思っている人がいます。しっかり勤務をして収入を得ているのに、奨学金の返済のためにホームレスになってしまった人の話です。私も大学院の時代に奨学金を受けました。修士・博士課程の5年間に奨学金を受けたので、その返済は苦しいものでした。しかし、宮城氏の場合は私の時代よりはるかに苦しいものです。じつにひどい世の中になったものだと感じました。私は宮城氏の親の世代です。一世代の間に、私たちはひどい世の中を作ってしまったものだと忸怩たる思いです。